

KYOTO



古典文学×伝統芸能×メディアアート

新猿楽記・Revision～序～ 創成プログラム始動！

開催日：2019年3月21日(木・祝)

開催時間：16:00～17:15

会場：ロームシアター京都 ノースホール

時代の風と民衆の坩堝で、文化が発酵し、醸造され、創成されていく

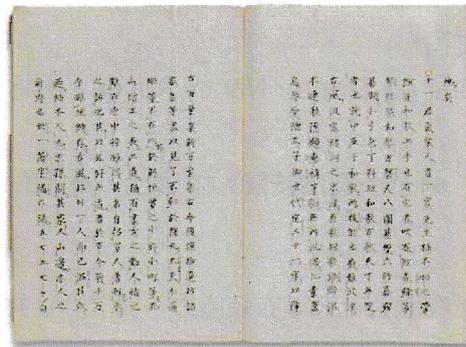
『新猿楽記』に描かれた「猿楽」に代表される文化の作り手と、それを支えた、文化の担い手たる京都の庶民。

双方の相関関係によって生み出される

京都の豊饒な文化創成のプロセスから着想したイメージを古代から現代、未来を繋ぐパフォーマンスとして創造する。

◇「新猿楽記」とは

平安時代中期に著された古典文学。著者は藤原明衡。ある晩、京の猿楽見物に訪れた架空の家族・右衛門尉一家に仮託して当時の世相・職業・芸能・文物などを列挙していった芸能尽くし、物尽くし、職人尽くしの書物。作者はある晩、京で猿楽見物をする。ここでいう「猿楽」は、平安時代におこった滑稽な大衆芸能のこと。それは今までになく見事なものだった、として、様々な猿楽のジャンルが紹介され、名人と呼ばれる人々の芸能の論評を行う。そして、猿楽見物に集まった人々の中で特筆すべき存在として、下級貴族である「右衛門尉一家」をとりあげ、右衛門尉の3人の妻、16人の娘とその夫、9人の息子一人一人の描写が始まる。家族構成や各人の容貌、生活態度に加え、各々の異なる職業や、それに関係ある事物の品目がそれぞれの業界で使われる専門用語で記されている。



『新猿楽記』 所蔵：国立公文書館

◇「猿楽」について

「猿楽」は古代世界にあった、西域、東アジアを源流とする雑伎、音楽、舞踊の総称である「散楽」がルーツとされる。西洋の要素を加えて様々に発展し、日本に渡来した「散楽」は、奈良時代、朝廷に保護され「官楽」として発展するが、平安時代になると徐々に「官楽」としての保護を失っていく。やがて下野した「散楽」は、寺社や街頭などで盛んに行われるようになり、それらがやがて「猿楽」と称されるようになったとされている。



「KYOTO STEAM-世界文化交流祭-」は、アート×サイエンス・テクノロジーをテーマに文化芸術の新たな可能性と価値を世界に問う新しい形態の国際的な文化・芸術の祭典です。2019年3月にプレ事業として「KYOTO STEAM-世界文化交流祭-prologue」を開催します。

※STEAMとは…Science(科学),Technology(技術),Engineering(工学),Arts(芸術),Mathematics(数学)

- 主催：KYOTO STEAM-世界文化交流祭-実行委員会
- 参加団体：京都市／京都市立芸術大学／京都市美術館／京都市動物園／(公財)京都市芸術文化協会／(公財)京都市音楽芸術文化振興財団
(公財)京都高度技術研究所／京都商工会議所／京都経済同友会／日本放送協会京都放送局／京都新聞社／京都岡崎 蔦屋書店
- 協力団体：(株)GK京都
- 特別協賛：京セラ(株)／ローム(株)
- 協賛：京扇子白竹堂／京とうふ藤野(株)／(株)京都銀行／京都信用金庫／京都中央信用金庫／(株)グランマール／月桂冠(株)／(株)江府
(株)エイアル西日本伊勢丹／(株)滋賀銀行／(株)ジュヴァンセル／(株)大丸松坂屋百貨店／(株)高島屋京都店／宝酒造(株)／(株)淡交社
(株)藤井大丸／(株)丸久小山園／(株)緑寿庵清水



平成30年度文化庁文化芸術
創造拠点形成事業

◇「新猿楽記・Revision～序～」の創成にあたって _____ 総合演出：高橋浩

「新猿楽記」は古今稀にみる「猿楽」の集大成と、「右衛門尉一家」に仮託した京という都市機能を構成するあらゆるジャンルの職業が網羅されている。なぜ芸能である「猿楽」と、一見つながりのなさそうな観客席にいる「右衛門尉一家」が対比されて描かれているのか。一つには「芸能」を育てるのは「観客」であり、猿楽に代表される「芸能者」を「文化の作り手」とすれば、「右衛門尉一家」に代表される観客は「文化の広め手」であり「担い手」であろう。さらに、大勢の観客の中から「右衛門尉一家」だけがピックアップされた理由を考えると、自ずと「右衛門尉一家」が、猿楽と深い関わりを持つ一族であろうと想像できる。そこで我々は、平安時代、諸芸能のプロデュースや興行によって財力を蓄え、下級貴族の地位を獲得するに至った集団となると、彼らは傀儡子一族だったのではないかという推測に基づき、「右衛門尉一家」を、猿楽をプロデュースする、傀儡子出身の一族として設定した。「猿楽」はユーラシア渡来の諸芸能を源流とする輸入された芸能であり、傀儡子も日本固有の民族ではなく大陸からの渡来人にルーツを持つことが様々な研究によって示唆されている。それらは古代日本の文化に対する寛容性を背景に、日本の風土に合わせた形態に変化しながら根付いていく。我々はこの、本来インターナショナルな芸能であった「猿楽」や、それをプロデュースした渡来民族を祖とする「傀儡子」と呼ばれた芸能集団をフィルターにして、相互の相関関係によって日本の芸能(文化)が創成され、育まれ、磨かれていくプロセスをパフォーマンスという形で表現する。パフォーマンスの制作に際しては、最も重要なファクターとなる日本初のプロ芸能集団・「傀儡子」の本質に迫るため、人形をはじめとした様々なツールを使いながら、身体の根源的な動きを追求し、国際協働プロジェクトによる制作体制を構築していく。

◆ プ ロ グ ラ ム ◆

- 「新猿楽記・Revision～序～」創成プログラムについて
- ワークショップのドキュメント映像上映
- ワークインプログレス
- 出演者紹介
- トークセッション
- ・コンセプトについて
- ・登壇者紹介
- ・ワークショップについて
- ・質疑応答
- ・「新猿楽記・revision～序～」の創成について 作品の方向性

□ワークインプログレス出演者

小笠原 匡 / Eric de Sarria / Nancy Rusek / 吉本 由美 / 青山 郁彦 ●協力：小林 ともえ / Simon Moers

□演奏

三原 智行 / 稲葉 明德

□トークセッション登壇者

高橋 浩 / 小笠原 匡 / Eric de Sarria / Nancy Rusek / 小林 ともえ / Simon Moers ●MC：緒方 辰之介

□スタッフ

- 総合演出：高橋 浩 / ●照明・舞台監督：林 高士 / ●音響：徳竹 敏之 / ●進行：田中 真琴 / ●制作：緒方 辰之介
- 通訳：川野 久美子

□協力

- 美術協力：ひだか和紙有限公司 / ●衣装協力：株式会社井筒企画 / ●ヴィラ九条山

□登壇者プロフィール

●高橋浩

演劇プロデューサー・演出家

映画の製作スタッフや舞台監督を経て、人形師辻村ジュン氏のプロデューサーとしてワールドツアーを行い1987年、故・徳川幸雄氏の北米・イギリスツアーを期に独立。フランス人演出家フィリップ・ジャンティの日本ツアーを手始めにサポートを開始。以後、国内外の様々な舞台、映像、イベントの制作・演出に携わる。

●Eric de Sarria

俳優・演出家・劇団主宰

学生時代から演劇を始め、ダンス、人形、アクロバットなど演劇における様々な分野で俳優としてのキャリアを重ねながら、様々なショーや舞台の演出を手掛ける。現在、フランスに活動拠点を置きながら、子供たちを対象にした人形やオブジェを使ったワークショップを世界中で運営している。

●Nancy Rusek

俳優・ダンサー・振付家

アントワープの「ロイヤル・バレエ・フランダース・スクール」でクラシックバレエを学ぶ。現在は、ダンサー・振付家としてフランスで活動中。アンディ・テグロート、フィリップ・ドックレス、フィリップ・ジャンティなど、世界的演出家の作品でダンサー、振付家として活躍。

●小笠原匡

和泉流能楽師

初世 野村萬、故八世 野村万蔵及び、九世 野村万蔵に師事。現在、『萬狂言』関西支部代表、東京・大阪・滋賀・千葉の「若菜の会」、「風流」、「延年之會」の主宰、千葉大学客員教授、放送大学京都学習センター客員教授、劇団「青年座」講師等を務める。

●小林ともえ (2019年ヴィラ九条山レジデント)

舞台美術家・衣装デザイナー

文化庁及び、ポーラ美術財団在外研修員として2007年に渡仏後5年間、フィリップ・ジャンティ・カンパニーで小道具、衣装担当として3作品のクリエイションに携わる。帰国後、「障子の国のティンカーベル」(マルチェロ・マーニ演出、2014)、「カリガリ博士」(一条座、2015)では人形美術を担当。

●Simon Moers (2019年ヴィラ九条山レジデント)

俳優・マリオンネットパフォーマー

ベルギー国立高等舞台芸術学校(ブリュッセル)で演劇を、フランス国立高等人形劇芸術学院(シャルルヴィル＝メジエール)で人形劇を学ぶ。2011年に同期生とPROJET Dを設立し、共同演出でBig Cérémonie等のマリオンネット作品を発表している。